慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一般公開シンポジウム : 理屈? 屁理屈? 理屈ぬき? : 考える心, 感じる心
Sub Title	
Author	伊東, 裕司(Ito, Yuji)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2007
Jtitle	活動報告書 Vol.1, (2007.) ,p.24- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20080300-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

10 一般公開シンポジウム
理屈？屁理屈？理屈ぬき？－考える心，感じる心－

開催日　2008年1月19日
企画班　全体
企画者　伊東裕司
講演者　瀬名秀明、田尻悟郎、入来篤史、子安増生、藤田和生、鈴木晶子、安西祐一郎

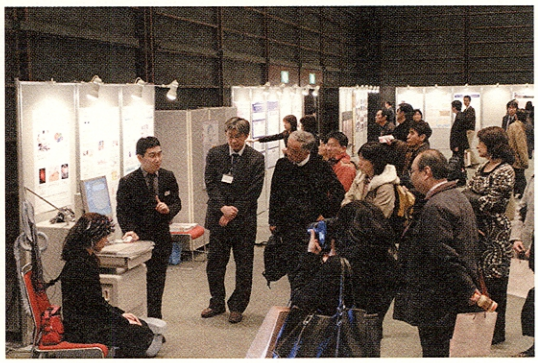
1月19日、東京国際フォーラムB7ホールにて、一般公開シンポジウム「理屈？屁理屈？理屈ぬき？―考える心、感じる心―」を開催した。このシンポジウムは2つの特筆すべき点を持っている。第1は、グローバルCOEで企画・開催される多くのシンポジウムと異なり、おもな聴衆として研究者ではなく一般の方を想定している点である。このようなシンポジウムを通じて、グローバルCOEの活動を広く知ってもらい、研究領域の面白さを理解していただこう、という趣旨である。実際に、この日は約240名の参加者においでいただいたが、そのかなりの割合は研究者以外の方であった。第2は、このシンポジウムが慶應義塾大学グローバルCOEプログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」と京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」の共催である、という点である。京都大学と慶應義塾大学は、2007年9月27日に「連携協力に関する基本協定書」に調印しているが、両グローバルCOEでも連携して事業を進めることになっている。今回のシンポジウムはその最初の企画、ということになる。

シンポジウムは3部構成になっており、午前中の第1部では、両グローバルCOEプログラムの拠点リーダーである慶應義塾大学の渡辺茂と京都大学の子安増生教授からそれぞれの拠点の紹介があった。いずれも「心の研究」に関する学際的なプログラムであり、多くの分野の連携により研究を進めていく構想が熱く語られた。

午後に入って第2部は、東北大学の瀬名秀明教授による「“生命”と“非生命”の感情世界」と題する講演、関西大学の田尻悟郎教授と慶應義塾大学の大津由紀雄による「論理と感性のせめぎ合い―言語教育の視点から」と題する対談が行われた。瀬名教授は、『パラサイト・イブ』や『BRAIN VALLEY』の作者として知られる作家であるが、文学作品や映画に登場するロボットなどの感情と論理について語られた。田尻教授は、独自のやり方で英語を教える名人英語教師であるが、授業の実演も含めながら大津教授との軽妙な掛け合いを行いながら、英語教育における論理と感性について語られた。田尻教授の授業実演に関しては、時間の関係上紹介できなかった部分も多かったようであるが、もう少し見たかった、という方も多かったのではないかと思われる。

第3部は、慶應義塾長の安西祐一郎の講演「論理と感性の認知科学」で幕を開けた。安西塾長は、専門である認知科学の立場から、人間の問題解決や人間とロボットとの相互作用における論理の働き、感情の働きについて語られた。第3部の最後は、パネルディスカッションであったが、まず両グローバルCOEの拠点メンバー（事業推進担当者）それぞれ2人ずつから話題提供が行われた。話題提供者とそのテーマは以下の通りである。京都大学グローバルCOEからは鈴木晶子教授：感覚のわざ―タクト、藤田和生教授：ねたみ、優しさ、思いやり―動物の高次感情について、慶應義塾大学グローバルCOEからは入来篤史理化学研究所脳科学総合研究センターグループディレクター：知性進化の神経生物学、伊東裕司：裁判員の判断におけるリクツとヒリクツ。論理と感性にまつわる、思想史、実験心理学、神経生理学と様々な分野にわたる、多方向からのアプローチが紹介された。続いて第2部、第3部の演者全員が壇上に登り、ディスカッションを行った。ディスカッションは、それぞれの研究や講演の内容が多岐にわたってい

ること、また司会者としての伊東の力量不足から、まとまった結論を導き出す、というものにはならなかったが、論理と感性をめぐる研究の可能性と面白さ、また多岐にわたる研究間の関連性などが示唆される興味深いものであったといえよう。

以上のほかに、本シンポジウムでは両グローバルCOEの研究者によるポスター発表とNIRSなどの研究装置の展示も行われた。休憩時間には、熱心な参加者と発表者のディスカッションが、あちこちで行われ、装置のデモを興味深そうにのぞく参加者も多くみられた。

一般向けの企画として、一般の参加者の方に興味を持っていただけたかどうかが非常に気になるところであるが、アンケートをお願いしたところ、非常に多くの方から回答をいただいた。ご協力に感謝を表したい。厳しいご意見も頂いたが、おおむね企画趣旨にかなったシンポジウムであったと思える回答であった。（伊東裕司）